

みかがみ祭とみかがみ神楽の内容と現状

清水 美里

はじめに

下関市豊北町大字神田地区大川には、「みかがみ祭」という式年祭がある。この祭は13年に一度、西年の冬に3日間かけて行われ、かつては「みかがみ神楽」が奉納されていたという。

本稿では、みかがみ祭・みかがみ神楽の概要と共に、平成29年（2017）12月12日（火曜日）酉日に執り行われた、みかがみ祭の現在の状況について報告する。

1. 大川の地域概況

みかがみ祭を行う大川（行政区としては下関市豊北町神田地区大川自治会）は、本州最西端の山口県下関市にある響灘沿岸地域の豊北町神田地区荒田から1キロ程内陸に入った、浅い谷合に広がる集落で、昭和57年（1982）には17戸だったが、現在は12戸の農業集落である。現在も過疎化が進み、少子高齢化が進んでいる地域である。

生業は水田耕作が主であるが、近年はサラリーマンなど市域内の第3次産業等に従事する人が増えており、兼業農家世帯がほとんどである。なお、昭和初年までは3、4戸ほど漁業にも関わっていたという。

2. 客神社

(1) 神社の概要

みかがみ祭は集落の中心に位置する「客神社」において行われる。この祭の祭主を代々行っていた伊良原家の背後にある山の南斜面を、一部削平して平地にしたところに、木造瓦葺の社殿が作られている。神社鳥居には「文化西11月吉日 氏子中 西嶋喜助」の名がみえ、この時期には大川集落民の熱心な信仰の対象であったことがわかる。神社周囲はマテバシイ、ヒメユズリハ等の社叢におおわれ、現在は下関市指定天然記念物になっている。

祭主者である伊良原家は昭和中期には転出されており、現在その敷地にはM家の家屋が建つ。ただ、平成10年（1998）神社本殿改修や、平成12年（2000）神社参道の舗装の際にも、伊良原家より建築資金の一部が出ており、伊良原家が現在でも神社の施設管理運営に携わっていることがわかる。

(2) 由来

『防長寺社由来』には、客神社について元文3年（1738）頃の記述があり、「伊予の国ヨリ勧請と申伝御座候得共、証拠無御座候故来歴知レ不申候」（伊予の国より勧請と申し伝えられているが、証拠はない。）とされている。

『風土注進案』では、「当社の儀は、伊予国より流れ来給う神霊に御座候、其由来は当村百姓三郎兵衛と申者先祖伊良原主税盛清と申者有之、天文四年の冬不思議に霊夢を蒙り神田村小森江と申所、男

女岩へ神霊御流寄被遊候由にて十一月十三日彼地に罷越、御神体御系図等御供仕罷かへり或森の内へ鎮座し奉候処、其夜神託に我は汝に有縁なる者故汝か宅辺に住し度と有之、郎只今の地へ鎮座し奉り候、然処神劍伊予国へ残居崇り有之に付河野何某と申者当地へ守護し来り、神告に依て御太刀は右の伊良原方へ諸事仕于今有之候、其後天正年中火災有之、書記等及び焼失御神体計り御残被遊候、同年十三年再建有之候由申伝候」（当社で祀っているのは、伊予から流れ来た神霊である。その由来はこの村の百姓三郎兵衛の祖先、伊良原主税盛清という人物が、天文4年の冬に不思議な夢を見た。神田村の小森江という所の男女岩へ神霊が流れ着いたというので、1月13日に「御系図等」をお供えし、ある森の中へ移したが、その夜に「我はお前に縁が有る者なので、お前の家の近くに住みたい」という神託があったので、現在の地へ祀ることになった。それからしばらくして、河野某が「伊予の国へ居残ったら崇りがあった」と神劍を当地へ守護してきた。神のお告げによってその太刀は伊良原家で所持されていたが、天正年間の火災で焼失し、書記なども焼失したため、御神体だけが残っている。同年13年に再建したと伝えられている。）とある。

また、神田神官の石井出羽によって書かれた『豊浦郡大河野村客大明神由緒覚』には、「豊浦郡大河野村客大明神者往古伊予之國より流神にて同村小森江と申所え御流寄被成にて種々希妙成御事御座候に付 只今之所え奉成鎮座由候 然処先年天正年中火難に縁記等をも悉焼失 御神体計近◆◆◆（破れており読めず）被成との儀候 依之同拾三年乙酉の夏右社致県立 神事任先例今以不怠」（昔流神が伊予の国からこの村の小森江という所に流れ着いた。様々な不思議なことがあり、現在のところに祀られている。天正年間に火災にあい、記録等も悉く焼失し、御神体だけが残った。同13年乙酉の夏に再建し、以降神事等怠っていない。）とある。その後、正徳2年（1712）の春にも火災に見舞われ、その際にも古い記録等が焼失したという。しかし、石井家には祖先より伝わった古書もあり、そして近くの村の古老から神社について伝え聞くことが出来たと書かれている。

現在、神霊が流れ着いたとされる小森江の男女岩はだんじょいわ双子岩と呼ばれ、大川西方の湿田中に存在するが、かつては入江の東湾部に位置していたと考えられる。

どちらの記述でも、神霊が伊予の国から3体の甕に付き添われて小森江に流れ着いたとあり、『風土注進案』では、その日が天文4年（1535）11月13日であったとされる。

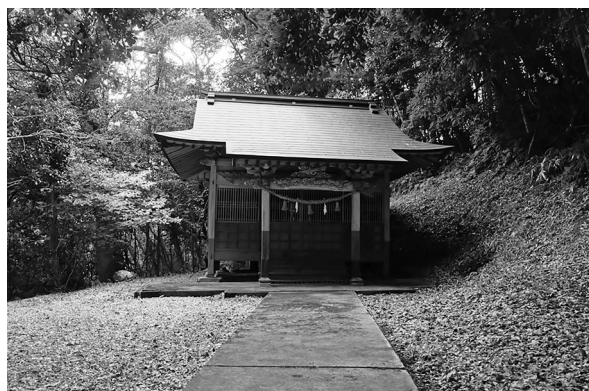


図1 客神社



図2 小森江の双子岩

(3) 祭神

『風土注進案』では大川客神社に祀られている祭神は「愛比命」とされているが、現在では「菊理姫命」と伝えられている。

祭神「菊理姫命」は、神殿の中のオム口（小さな木製の祠）に入れられた^{ひのき}松の箱へ米と一緒に納められている。米は1升ほど入れられ、その米の上に祭神が置かれている。

現在神殿にはオム口の他に、鏡、鉾、花瓶、甕2個が納められている。

3. みかがみ祭

(1) みかがみ祭の概要

みかがみ祭は13年に1度、酉年の冬、酉日酉刻に始まり3日間を通して行われる祭とされている。由来ははっきりしないが、大川自治会で所蔵されている『みかがみ祭神楽舞伝説』には、天正年間から始まり、およそ600年以上続く祭とされている。元文3年（1738）頃に書かれた『防長寺社由来』にも祭について書かれているので、少なくとも280年以上は続いていることになる。

祭日は『風土注進案』によると11月の酉日とあるが、近年は12月（旧暦11月）の、酉日に近い日曜日であったり、酉日であったりと、多少の変動はあるものの、酉の日が基準となっていることに変化はない。

「聞き書き」による、祭の3日間の内容を大まかに分けると、

1日目酉の刻 御神体を祭主である伊良原家の前に作られた仮殿（木造萱葺で臨時に神楽殿）へ降ろす。

2日目には仮殿で神楽が、向いの田圃では相撲が行われ、3日目に御神体を仮殿から神社へ戻す。という内容である。

みかがみ祭・神楽についての調査はあまり行われておらず、江戸期に記された『防長寺社由来』や『防長風土注進案』でも、始まった詳細な年代は不明であった。昭和44年（1969）以降に調査された『防長神楽の研究』では、今回の平成29年（2017）の調査では分からなかった儀礼について書かれている一方、既に神楽や儀礼が失われつつあることが書かれている。また、昭和57年（1982）と、平成10年（1998）頃に豊北町教育委員会によって調査もされているが、時間が経つほど取材で得られる情報が減っているように感じられる。祭を行う大川自治会でも、理由は分からないが、みかがみ祭に関わる資料はほとんど無いという。

(2) 祭主

この祭を執り行う祭主は大川に住む伊良原家の当主とされていた。『風土注進案』によると、祖先は伊予の国に住まう河野一族とされている。

この伊良原家にまつわるものとして、『風土注進案』には古墓があると記述されており、「一古墓 古墓壹ヶ所 壹ヶ所 大川に在 但百姓三郎兵衛抱の地に有之、銘左の通 地藏歸元 壯公園春禪定門天文十年十二月十三日伊良原主税盛清 空風火水地 雲法宗休禪定門永禄十二年（ママ）廿八日伊良原三郎兵衛博久」と記されていることから、伊予の河野一族から分かれた伊良原家は中世頃から大

川に住んでいたことが分かる。

みかがみ祭は、この伊良原家当主が中心となり執り行われ、神田二ノ宮宮司が補佐をしていたという。しかし現在、伊良原家は大川から転出されており、祭には関わられていない。そのため、祭の神事は神田二ノ宮宮司によって執り行われている。

伊良原家が転出した後はM家¹がその地に住んでおり、祭の際に立てる幟の竿や、見本としてのオムロを保管されている。また、一時期は伊良原家に代わり、祭で祭神と共に入れる米を育てる「神饌^{しんせん}田^だ」の管理なども行っていたという。

(3) 甕 (かめ) と「みかがみ」

大川客神社には素焼きの甕2個と、首の長い花瓶が1個ある。今回計測はできなかったが、『豊北町大川の「みかがみ」祭 指定意見書』(昭和57年(1982))では甕は約22cmと書かれている。また、この甕の製作年代について、1つは素焼きの甕で中世の備前系の焼物と思われる。もう1つの甕は焼成度が前者に比べて低く、産地は不明だが、生産年代は同時期だと考えられる。首の長い花瓶については、甕ほどは古くないと推測される。

みかがみ祭の「みかがみ」とは「御鏡」ではなく、これらの甕を指した、「甕神」のことではないかと『豊北町史』では指摘されている。『風土注進案』には大川客神社にある古物として甕が記されているが、祭の始まった当初はこの甕が御神体だったのではないだろうか。

この甕の製作年代が中世であり、『風土注進案』に記された天文4年(1535)からあまり外れないため、客神社と祭の始まりは天文4年(1535)からそう離れてはいないと考えられる。

この甕は現在、大川客神社の神殿の中で御神体と共に安置されており、祭の時のみ取り出し、布で拭いたら神殿へ戻される。以降13年間取り出すことはない。



図3 甕

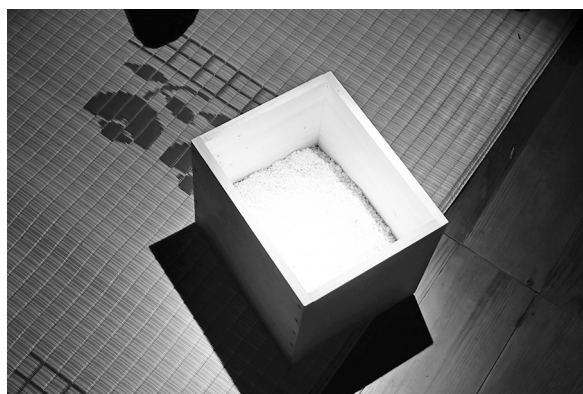


図4 13年前(平成17年(2005))の米

(4) 祭の準備について

3日間祭が行われていた頃は、酉年の正月に話し合いが行われ、子どもは夏休み頃から祭で奉納する神楽の練習を行っていたという。また準備にも各世帯から一人ずつは来ていたので、18名以上が参加していた。

昭和初頭のみかがみ祭の準備については、『防長神楽の研究』で触れられており、現在では伺えな

い内容が記されているため引用する。

「御敷米ごしきまいを調える役にあたるのは大川部落の最長老であり、選ばれたものは女人禁制、牛馬や肥料を使用することなく伊良原家の家つきの神饌田である2坪くらいの土地に粃を6升くらいまいて耕作する。収穫された米は一升ビンの中に入れて、櫛を口にくわえ、無言のままで1升が7合くらいにへるまで米搗うきをする。その所要時間は3時間くらいであり、米搗きの最中には人が話しかけたり、近寄ることを禁止している。現在では臼にいて軟杖（餅つき用の杵）で米の精米を行っている。そして御敷米は1尺四方で深さが5寸くらいの蓋付の桧製の箱に入れられる。（中略）

また祭礼の当日、御神体の覆衣として絹地3端を献上する例があるが、これは御敷米搗役つきやくをつとめる大川最長老の女が織女おりおんなをつとめるという吉例であったが、現今では既製品を代りに使用している。

このミカガミ大祭の折に奉納する神楽の舞場である仮屋は、部落の各戸より1人あて出役をして、2日かかりで建てる。広さは3間四方で周囲に8本の柱をめぐらし、東に半坪ほどの神座を設け、そこには部落の戸数と同数の米俵をおいたが現在ではすくも俵を使用する。舞場の広さは6坪ほどで、屋根は藁でふき、周囲にはお宮の幕を張る。」（『防長神楽の研究』頁91～92引用）

引用に出てきた仮殿は、伊良原家のオモテノマ前面に立てられたという。西（海側）を正面とし、3間四方の切妻入で、柱は全て加工しないままの黒木、屋根は草葺だったという。祭神を置くための場所について、『豊北町大川の「みかがみ」祭 指定意見書』には、「祭壇は粃俵のミニチュア15俵を2段に積んでつくる。その俵をお敷き俵と呼び、現在は粃殻を詰めているが、吊り手を持つ俵の形式からして本来は種粃を入れていたものと考えられる」と書かれているが、『防長神楽の研究』では「13俵の俵」とされている。

また、祭で奉納される神楽の準備についてはこのように記されている。

「舞子は男の子で昔は5、6歳—15、6歳くらいのもので担当していたが、これらの年齢に相当する者がいない場合には青年が代役に選ばれていた、したがって祭の練習も前年の夏休みより行われ、指導者の大人もふくめて食事やおやつを負担したので相当な出費であった。昔は小豆粥を食べて練習したということである。舞子たちが舞いを一通りおぼえると花ぞろいといって部落の者に披露をした。」（『防長神楽の研究』頁92引用）

現在では、毎年12月の第1日曜日に、大川自治会館で注連縄作りを行っており、神社の鳥居、拝殿、神殿等の注連縄を取替える。その際に祭の準備も行う。しかし神饌田は近年耕作されておらず、そのため奉納される米にまつわる神事や行事などは失われている。また、御神体と共に納められる米の量も変化しており、今では1升となっている。

仮屋は平成5年（1993）までは作られていたが、以降は作られていない。また、祭神が納められているオム口の下に敷いていた俵は前回の平成17年（2005）年までは用意されていた。

（5）祭の当日

近年の祭は酉刻から始まり、1日で終わっているが、本来は3日間続く祭である。『風土注進案』には、「一 酉の年毎拾三ヶ年目に大祭執行、祭日ハ十一月酉日を中日にして二夜三日盛清の子孫三郎兵衛屋敷内へ假屋を掛御幸相成候、其節御供奉舊例にて右三郎兵衛方御供仕り河野何某の子孫、特牛村百

姓彌三吉と申者方御神弊御供仕來候」(13年に一度酉年に大祭を行う。祭日は11月の酉の日を中日にして3日2晩、盛清の子孫の三郎兵衛の屋敷の前へ仮屋を作り御神幸をする。その時河野某の子孫、特牛の彌三吉という人物が神弊をお供しに来る。)とあり、江戸時代にもみかがみ祭が行われていたことが分かる。

現在の祭には特牛の人物は関わっていないが、『豊北町大川の「みかがみ」祭 指定意見書』では、この百姓彌三吉の子孫は浜出祭において弊司をつとめる藤野家であると伝えられていると書かれている。

昭和8年(1933)に行われたみかがみ祭の資料も一部残っており、当時の神事の内容が分かるため以下引用する。(図5-1～5-5)

假殿之儀 十二月八日 午後六時 衣紋用意 午後七時	一 着座 別図面之通	一 祓式 祓詞ヲ奏ス	一 祭員 大麻行事 切麻行事 塩湯行事	祓順序 假殿神座 御室 御敷米 齋主 以下 祭員 鎮祭主 伊良原幸助 以下弊司	諸役 雑役 一般参拝者
------------------------------------	---------------	---------------	------------------------------	-----------------------------------------------------------	-------------------

図5-1 *別図面については不明。

本殿之儀	一 一同着座 別図面之通	一 御神楽 太鼓 笛	一 開扉	一 遷座奏上詞 祝詞	一 鎮祭主神儀ヲ御室ニ 遷ス其前神宝 大刀鏡ヲ役ニ渡ス	一 神儀ヲ奉載ス 豫メ覆面ノ用意	一 鎮祭主進テ神殿階下ニ着座 一揖ニ拜ニ拍一拜一揖終テ	一 消燈 豫メ用意セル 假案ニ	一 神儀を遷シ(新調セル御室内の靈箱) 白布ヲ以テ身體ニ搏ス	一 警蹕 砂(眞砂) 祓
------	-----------------	---------------	------	---------------	--------------------------------	------------------	--------------------------------	-----------------	--------------------------------	-----------------

図5-2 *別図面については不明。

渡御 行列別図面ノ通	一 假殿着御	一 先ツ案上ニ靈ヲ木綿ヲ解キ	一 假殿ニ奉案	一 警蹕	一 御神楽	一 点燈 終テ小憩	一 前夜祭ノ儀	一 一同着座	一 祓式	一 大麻行事	一 切麻行事	一 塩湯行事	一 祓順序	一 神饌齋主側一同 鎮祭主側一同
------------	--------	----------------	---------	------	-------	-----------	---------	--------	------	--------	--------	--------	-------	---------------------

図5-3 *別図面については不明。

緒役一同 神楽舞一同 参拝者一同	一 献饌 此間御神楽 太鼓 笛	一 神職一各献饌長奉仕	一 鎮祭主献饌後取奉仕	一 弊司 惣代 同様	一 大祓 三巻	一 短稱辞 三反	一 天ツ罪国ツ罪祓此清メテ物皆清々志	一 祝詞 終ツテ 御神楽	一 玉串拝	一 齋主 以下祭官列拜	一 // 鎮祭主 弊司 諸役	一 搗男 織女 請役	一 神楽十二番
------------------------	-----------------------	-------------	-------------	------------	---------	----------	--------------------	--------------	-------	-------------	----------------	------------	---------

図5-4

式年濱殿当日祭	一 着座	一 大麻行事	一 切麻行事	一 塩湯行事	一 祓順序	一 神饌、祭主齋主	一 神楽 十二番
---------	------	--------	--------	--------	-------	-----------	----------

図5-5

3日間行われた祭事の順は、『豊北町大川の「みかがみ」祭 指定意見書』から引用する。
「1日目の酉の刻に仮神殿の儀が行われ、仮殿祭壇、御室、御敷米、祭主、弊司、所役の順にお祓い。
酉の刻を一のみくらという。仮殿の儀終了後、次のようにトモゾロイして客神社に向かう。
先導—砂祓—塩湯—大麻（弊司）—切麻—錦旗—太鼓—四神鉦—神官—太刀—神鏡—霊箱（祭主）—
お供—神官—氏子
この時、大川の灯を消し、物音をたてない。

客神社における本殿の儀の中心は、神体の遷座であるが、暗がりの中で祭主によって行われる。

12年前の御室から白布に覆われた神体をとり出して用意した霊箱に移し、別の白布をもって霊箱を体に結びつける。

仮神殿への^{とぎよ}渡御は、砂祓と大麻が前後入れかわる。着御後、奉持した霊箱を新調された御室に移し、点灯して前後祭の儀が開始される。

第3日目の還御の儀も酉の刻にはじまる。迎いのトモゾロイと同じ順に列を組んで御室を客神社におさめる。」

1日目に、客神社の神殿から仮殿までオムロが渡御する際と、3日目の仮殿から客神社の神殿まで渡御する際には、移動する列の足元に白布が敷かれていたという。一枚の長い白布が神殿から仮殿までずっと敷かれていたのではなく、数枚の白布を順繰りに敷いていたという。

この祭の間、祭主である伊良原家の当主は別火をとり、忌のために部屋へこもっており、食事は大川の長老が運んでいたという。

このように、過去の祭は3日間行われていた。祭の期間中には出店や炊き出し、神楽や相撲も行われる大きな祭で、近隣からは勿論、遠方からも人が来ていたという。しかし、昭和56年（1981）の12月11日～13日にかけて3日間行われて以降、平成5年（1993）は12月18日～19日の2日間、平成17年（2005）は12月15日の1日と年々短くなっている。

神殿とオムロが開けられるのは、みかがみ祭の時だけであり、神殿から出されたオムロから桧の箱が出される。その箱の中の1升の米は13年前のもだが、腐敗しておらず、虫もついていなかった。

この米は不老長寿の御守、豊作の御久米として参拝者や参加者らに配られていたもので、この米を貰うために遠方からこの祭に来る人も多かったという。しかし近年は大勢の人が米を貰いに参拝するという光景は見られない。



図6 昭和44年（1969）みかがみ祭の様子



図7 平成17年（2005）の祭壇



図8 昭和44年(1969) 仮殿の神楽を眺める人々

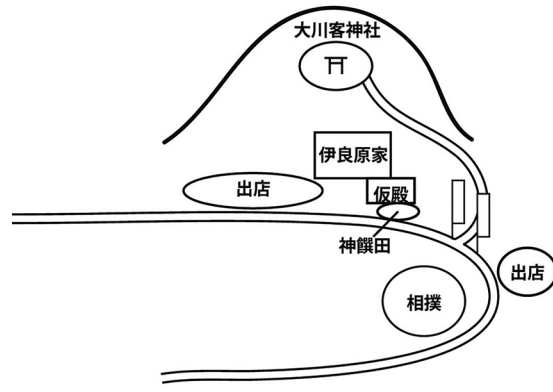


図9 昭和44年(1969) 祭の図

4. みかがみ神楽

(1) みかがみ神楽の由来

みかがみ祭で、昭和32年(1957)まで大川の男児によって奉納された神楽を、みかがみ神楽と呼ぶ。現在残っている資料から分かるみかがみ神楽は、民間で行われる里神楽の中の採物^{とりもの}神楽である。昭和57年(1982)4月21日に豊北町指定無形文化財(現:下関市指定無形民俗文化財)に登録されている。

みかがみ祭同様、正確な由来は定かではないが、『防長寺社由来』には「毎年の儀は11月酉の日祓神楽執行仕候、十三年二老度宛二夜三日の儀社人数十人集り神楽神舞湯立執行仕候事」とあり、社人によって神楽が舞われていたとされる。

しかし、現在残っているみかがみ神楽は、明治以降、島根県(出雲、もしくは石見の瓦職人など諸説有)から伝えられたものだとされている。そのため、みかがみ神楽の演目は、島根県西部で演じられている石見神楽の演目と同じものが多い。また、用いられる道具も石見神楽と共通する部分が多い。

既に述べたが、大川に石見神楽が伝わる明治以前は、社人が集まり、神楽が奉納されていた。一般的に、社人によって舞われていた神楽が途絶えるのは、明治に入り神楽禁止令が敷かれたからとされる。資料が少ないため、石見神楽が明治のいつ頃に大川へ伝わったのか断定するのは難しいが、少なくとも、明治に入り神祇院から「神職演舞禁止令」「神懸り禁止令」が出されて以降、大川に石見神楽が伝わったのだと思われる。『山口県の神楽』で財前司一氏は、明治31年(1898)頃に大川へ神楽が流入したのではないかと推測されており、一方で『防長神楽の研究』^{みそのうおうすけ}で御園生翁甫氏は明治初年に伝わったとしている。

なお、このみかがみ神楽が大川自治会の男児によって奉納されたのは、昭和32年(1957)が最後である。以降は昭和44年(1969)に出雲から、昭和56年(1981)には美祢市^{おふく}於福から神楽団を招いて神楽を奉納したという。以降神楽の奉納は行われていない。

現在大川ではみかがみ神楽の資料として『みかがみ祭神楽舞伝説』、昭和56年(1981)に写された『着付・小道具明細表』『御鏡大祭・舞のせりふ』と、原本が保管されている。これらの資料を用いて神楽を奉納していたというが、原本が誰によっていつ頃書かれたのかは不明である。

(2) みかがみ神楽の特徴

現在伝わっているみかがみ神楽の特徴の1つは、5～16歳ほどの子供が舞うことである。多くの

神楽は大人が舞うのが普通であり、伝えられたとされる石見地方でも、子供が中心となって舞う子供神楽が普及し始めたのは昭和に入ってからのことである。この子供神楽の発足以前から子供が中心となって奉納していたのは珍しいことだと思われる。また、1人につき1つの役柄だけ演じていたという。

現在、みかがみ神楽で使用された道具の多くは失われているが、神楽で使用された用具らしい物が数点残っている。1つは、神殿にオムロと一緒に納められている鉾である。やや小ぶりで、赤、緑、白のテープで柄に模様を描かれており、みかがみ神楽で使われていたものと思われる。他には、「正木の舞」で使われた茅の輪も残っており、現在は大川自治会館で保管されている。

また、衣装や神楽面も大川自治会館で保管されており、神楽面10点、蛇頭1点、蛇胴1点の他、冠や鎧等も保存されている。鎧は装飾した厚紙を紐で繋いで作られるため、分解した状態で納められていた。

(3) みかがみ神楽の天蓋

みかがみ祭で作られた仮殿には、みかがみ神楽で使うための天蓋が吊るされていた。

天蓋とは「クモ」とも呼ばれる、組み合わせた竹に五色の幣が吊るされたもので、石見神楽の行われる島根県内では西に行くほど簡素な造りになると言われている。

天蓋は、2つの天蓋が組み合わさって出来ており、竹で組まれた大きい天蓋の中に、更に小さい天蓋が9つ吊るされる。

石見神楽では、小さい天蓋に神が乗って遊ぶと伝えられ、天蓋を使う「天蓋曳き」という演目がある。石見神楽の中でも古式を残すと言われる、大元神楽が行われる時にしか見ることの出来ない貴重な演目である。これは、天蓋を曳くことで、天蓋が激しく動き、まるで神が遊んでいるかのように見えることから、天蓋に宿る神々を遊ばせるという演目である。



図10 みかがみ神楽の天蓋 (昭和56年(1981))



図11 昭和32年(1957) みかがみ神楽
(所蔵：大川自治会)

この天蓋曳きは昔、1人で曳いていたとされるが、現在では複数人で曳く場合が多い。また、昔は天蓋の上下する中で、1人の小男が剣を持って舞っていたともいい、ここで神がかりする場面があったと言われている。

昭和56年(1981)に撮影された映像の中では、「天蓋」の演目が映っている(図10)。天蓋は6つで、



図 12 提灯蛇胴 (所蔵：日和大元神楽団)



図 13 みかがみ神楽の蛇胴 (所蔵：大川自治会)



図 14 石見神楽の鬼面 (所蔵：日和大元神楽団)



図 15 みかがみ神楽の鬼面 (所蔵：大川自治会)

白・緑・赤の紙で作られた飾りが付いている。その6つの天蓋は1人で曳かれており、動きも石見神楽の「天蓋」に比べると激しくなく、比較的整って動いている。

(4) みかがみ神楽の面・蛇胴^{じゃどう}

みかがみ神楽で使われた面は、全て子供の顔の大きさに合わせて作ってあり平均して約20cmほどである。石見神楽の面に比べると小さい。また、作りも現在の石見神楽で使われる面ほどは洗練されておらず、色は一般的な絵の具で塗ってあるという。

蛇胴は、八岐大蛇を演じる時に使用される蛇の胴体のことで、石見神楽では図11の通り、長く繋がった提灯のような形になっており「^{ちょうちんじゃどう}提灯蛇胴」と呼ばれる。

みかがみ神楽では「提灯蛇胴」が開発される以前に神楽が伝わっていると考えられ、「提灯蛇胴」が使われていない。石見神楽も、提灯蛇胴が発明される以前は、この様な形であったのではないかと考えられる。

(5) みかがみ神楽の演目

昭和32年(1957)に写された『御鏡大祭・舞のせりふ』で記された舞は、下記の20演目である。「^{しょうぎ}どうのくち、そうどない、神酒供え、天蓋、神迎え、芝の舞、鉾の舞、正木の舞、五郎の舞、天神記の舞、弓の舞、三韓退治の舞、八上姫の舞、大国主の舞、月日の舞、住吉春日の舞、^{うずめ}鉦女の舞、岩

戸の舞、大蛇の舞、幣の舞」

このようにみかがみ神楽の演目は、多くが石見神楽と共通している。しかし、一部石見神楽にも存在しないタイトルの演目もある。

同年に写された『着付・小道具明細表』や、『みかがみ祭神楽舞伝説』と見比べると、演目のタイトルや、有無に多少の違いがある。『みかがみ祭神楽舞伝説』によると、「神酒そなえ、シバの舞、幣の舞等併せて神迎えの舞と申して」と、神酒そなえ、シバの舞、幣の舞等をあわせて神迎えとし、「鉾の舞、弓の舞、釣の舞は御祭神、及び神事を守護する舞で威厳を備える舞であります。」と、鉾の舞、弓の舞、釣の舞を守護の舞としている。これらの演目は、ほとんどが所作のみの儀式舞だと思われる。

また、ウズメの舞、月日の舞、住吉春日の舞の3つをまとめて岩戸の舞とされている。

これらをまとめると以下（図 16）のようになる。また、口上とストーリー性のある能舞^{のうまい}のみ石見神楽の演目と比較する。

みかがみ神楽		石見神楽
どうのくち		
そうどない		
神迎え	神迎え	
神酒供え		
芝の舞		
幣の舞		
天蓋		テガイ 天蓋
鉾の舞	守護の舞	
弓の舞		
(剣の舞)		
岩戸の舞	岩戸の舞	イワ 磐戸
月日の舞		
住吉春日の舞		
鈿女の舞		
正木の舞		ショウキ 鍾馗
五郎の舞		ゴリュウオウ 五竜王
天神記の舞		テンジン 天神
山田おろちの舞		ヤマタノオロチ 八岐大蛇
三韓退治の舞		サンコン 塵輪
八上姫の舞		？
大国主の舞		ヤソガミ 八十神

※石見神楽での呼称は一例であり、特に「五竜王」は、複数の呼称がある。（「五王」「五郎王子」等）

※「剣の舞」は『みかがみ祭神楽舞伝説』に名称のみ出てくる演目。

図 16 みかがみ神楽と石見神楽の演目比較

一つだけ不明な「八上姫の舞」については、口上が残っていないが、所作をメインとした儀式舞とは考えにくいタイトルであり、また詳しい説明も記されていないが、『着付・小道具明細表』には、八上姫、音彦、武彦という登場人物の用具が記されている。

八上姫、音彦、武彦は、石見神楽では「八十神」という演目で登場する。前半は、八上姫へ音彦、武彦が求婚をし、後半は、大国主命が八上姫をめぐる音彦、武彦と戦うという演目である。そのため、岩戸の舞と同じく、「大国主の舞」と「八上姫の舞」は2つで1つの舞だとも考えられる。

(6) みかがみ神楽の口上と比較

みかがみ神楽の口上の中から「正木の舞」を取り上げて、石見神楽の口上と比較する。

比較対象の石見神楽の口上には『御神楽舞言立目録』（文化9年（1812））から、「鍾馗」を用いる。「鍾馗」という演目は石見神楽において非常に馴染みのある演目である。比較的口上も短く、わかりやすい内容であるため、大人の神楽団、子どもの神楽団問わず、様々な上演会で目にすることができる。

だが、この「鍾馗」が重要な演目の一つであることも間違いない。神（スサノオノミコト）と鬼の1対1のわかりやすい構図ではあるのだが、上演時間が1時間にも及ぶことがある。衣装の早変わりや、スモークが焚かれるなどという派手な演出はないが、じっくり舞うためである。基本的には舞の上手いベテランが行うとされる。

ところで、この「鍾馗」という演目は、同じ石見神楽の同じ演目でも、比較的古いとされる六調子と比較的新しいとされる八調子では微妙に内容が違う演目でもある。六調子ではこのような筋書きである。

昔、素戔鳴尊すさのおのみことは唐国に渡った時、「鍾馗大神しょうきだいじん」と名乗り、虚耗きよもうという悪を退治した。その怨念や眷属が日本へやって来て民を悩ましているのを、素戔鳴尊すさのおのみことは疫神えきじんという悪と対峙する。疫神は全ての病を司っており、やってきたからにはこの国を魔国にするという。合戦の末、素戔鳴尊は十束の剣と茅の輪をもって退治する。

これに対して八調子神楽での筋書きはこうである。

唐の玄宗皇帝が疫神に苦しめられているのを聞いた鍾馗大神（素戔鳴尊）が、十束の剣と茅の輪を用いて病を司る疫神と対決する。

どちらも殆ど同じ内容ではあるが、恐らく、この八調子の筋書きは、六調子の筋書きをもとにして作られたのだと推測される。

『みかがみ祭神楽舞伝説』にはこう書かれている。

「六、鍾馗の舞ににぎ 素戔男命が鍾馗大神と名を名乗り悪病退治をする舞で悪病神の口上、セリフに「春のぎゃくれ、夏のぎゃくれ、秋のちはるに冬がい病、一切病のつかさ大悪鬼とは我が事なり」と言ふ一節があります。今日紀園祭で悪病退散が行われた場面と同じです。」

この文章から、みかがみ神楽において「疫病退治」が主眼に置かれていることや、登場人物は「たけはやすさのをのみこと」であるにも関わらず、素戔鳴が「ににぎ」と読まれている等の変化がみられる。

●みかがみ神楽「正木の舞」

そも われはこれ。天つ神の弟たけはやすさのをのみこととはみずからがことなり。こんど。いこくにわたり。正木大神と名をなのり。けもうとまうすものを。だいじしが。そのもうこんか。けんどくか（眷属か？）。わがちうに。きたりじんになを。なやむによりわれこのたび。あとをしたい。たいじせわやと思ふなり

鬼の口上

それにたちむこうたるは。いかなるかみにてましますぞ

正木大神口上

をゝわれは。正木大神といへるかみ。なんじいかなるまほふどや

鬼の口上

春のぎやくれい夏のぎやくれい秋のちあるに冬がい病一っさいやまいの。つかさ。だいあつきとはわがことなり。

正木大神口上

なんじまるが。をしえにしたがえよ。したがわんにおいて。この と (た)づかのけんをもちて。なんじがうんめい。うちとな(つた)たることただいまなり

鬼の口上

やれをかしやな。をもしろや。いかに正木大神のしゅごたりともあまたのけんどく。ひきつれて。むらむらくにぐにはせまわり。かまどかまどにをしよせて。大日本のしんこくを。まこ八(く)にせ八(あ)でをくべきか

『御神楽舞言立目録』 鍾馗

神 抑是八日の神ノ弟素戔鳴といへる神也 去レバ我其昔韓国へ渡りし時 自鍾馗大神と名乗り虚耗といふものを退治せしが 其怨念か眷属か諸人に悩ミをなすと聞 是を尋はやと思ふなり

鬼 あれに立向ふたるはいかなる神にてや候

神 フ、我ハ是 鍾馗太神といふもの也。汝はいか成者やらん

鬼 フゝ我ハ是 春の疫癘夏の瘡病秋の血腹冬の咳病一切病の司と成て民の命を取喰ふ大疫神とは我が事なり

神 汝我が教に随て外津国へ退くか 左もなくバ汝が運命とゞめん事只今の事也

鬼 いかに鍾馗太神の守護也とも 我此国ニ入来れば国々村々かけ廻り家々竈々に押入て 稚き者をばひねり殺し 老たる者は摺ひしぎ さかん成者と見るなら 五臓六腑にわけ入肝のたばねを喰ちぎり 民の命を取尽し大日本の神国を魔国になさで置べきか

比較してみると、「鍾馗」が「正木」と字が変わっているが、内容は六調子のものでほとんど同じで、口上が読みやすくしてあるということが分かる。

また、鍾馗の舞と思われる写真(図11)を見ると、神役の子どもの手には十束の剣と茅の輪が握られており、面はかなり変化しているが、採物はあまり変化していないということが分かる。

その他の演目の口上も、「八咫」が「山田」となっているなど、文字の変化が見られるが、内容はあまり大きくは変わっていない。特に、石見神楽の中でもかなり長い口上がある「五竜王」の口上の内容も、ほとんど変わらずに伝わっていた。

5. 調査報告資料「平成29年みかがみ祭」

最後に、平成29年(2017)に行われたみかがみ祭の準備と祭の内容について記す。

平成 29 年（2017）は、注連縄作りと祭の準備を 11 月 26 日（日）に約 8 名ほどで行った。本来ならば、12 月第 1 日曜日に行く予定だったのだが、参加者の都合と、「祭の年だから早めに準備をしよう」という意見により例年より早めに行った。以下時系列で記す。

11 月 26 日（日曜日）8：00～9：50

自治会館外に置いてある石に藁を乗せて叩く。叩いた藁は自治会館内へ運び、小縄と房飾りを作る。男性 2 名が行う。外では左回しの注連縄を作る。2 つの庚申様の注連縄（頭とサル）、鳥居、拜殿、神殿の注連縄合せて 7 本作る。出来た注連縄から自治会館内へ運び、飛び出た藁を切り整える。

この時使われていた藁は、田耕から貰ったもの。余った藁は来年へまわす。本来なら藁も全て大川のものを使うが、近年は田耕から藁を貰っている。

9：50～11：15

注連縄を作り終わった。数名が M 家へ向かい、現在 M 家の納屋で保管されている幟竿を確認しに行く。前に一度折れたことがあるので、今年は大丈夫かを見る。残った人は注連縄から飛び出た藁を切り、まだ出来ていない藁細工を作る。確認した人たちが帰ってきたら、その人たちも藁細工の手伝いをする。その際に藁包丁の使い方や、しめ縄の作り方を若い人に教えながら作業を行う。

11：15～11：42

わら細工を全て作り終え、神社に幟竿を立てに行く。今回の酉の日は平日で、祭当日朝に幟竿を立てる人数が用意できないため今日立てる。

幟竿を立てる石に通す木の棒があるが、上手に通らないため、近くに刺さっていた鉄棒をその場で切って使用した。恐らく鉄棒は昔祭で使っていた物かと思われる。

鳥居や拜殿などに掛ける注連縄は、例年であればたわませるが、今回は神事で頭をぶつけないよう、たわませずに掛ける。

12 月 12 日（火）みかがみ祭当日

8：00～

神社の境内、社殿内の掃除。榊を切り、神殿に供える。

新しいオムロ、新しい桧の箱を用意し拜殿右側に置く。

9：30～

幟を立てる。立て終えたら一時解散。

15：00～

再び集合し、供物を新しいオムロの前へ並べる。

16:00～

宮司が来られ、供物を拝殿へ移動させる。玉串を作る。
みかがみ祭の内容は以下の通りである。

17:00～

神事開始 全員で一拝。祝詞をあげる。(略式なので一つのみ)

17:12～

神社の灯りを消し、神殿からオムロ・鉾・鏡・花瓶・褌2つを取り出す。その間、宮司は「オオー」という声を上げ、幣振りは金幣を振り、音を出す。

暗闇の中で取り出した古いオムロの中の箱から、新しいオムロの中の箱に御神体を移す。この時、あらかじめ米は1升ほど箱に入れてある。明かりをつけ、褌と花瓶を布で清拭。

17:22～

新しいオムロを鉾・鏡・花瓶・褌と共に神殿に戻す。

17:24～

供物奉納 一つずつ手渡しで神殿前に並べていく。

17:30～

祝詞をあげる。

17:35～

一人ずつ玉串を奉納する。

17:40～

神事終了 全員で一拝。



図 17 平成 29 年 (2017) 祭りの様子 1



図 18 平成 29 年 (2017) 祭りの様子 2

6. まとめ

このように、今まで調査されてきたみかがみ祭・みかがみ神楽を比較すると、時代を経るごとに祭と神楽が変化してきたことが分かる。祭は儀礼が減り、神楽は社人から民間へと変わって、今は奉納されなくなってしまった。しかし、祭の際に明かりを消すことや、米を替えること等、続いているものもある。元文3年(1738)に記された『防長寺社由来』では、すでに由来もはっきりと分からなくなったとされる客神社ではあるが、大川の住民に支えられて、13年に1度みかがみ祭が行われていたであろう。この3日に渡る祭が、少なくとも280年以上続いているというのは、驚くべきことなのではないだろうか。

現在も、みかがみ祭は大川自治会の方々によって、13年に1度行われている。だが、祭を準備する大川の人口も減りつつあるため、祭自体の存続も危ぶまれている。しかし、この貴重な祭がこれからも未永く執り行われることを祈るばかりである。

また、みかがみ神楽の残っている口上や、大蛇の胴から、古い石見神楽の姿を残していることが分かる。島根県から伝わり、変化し、そしてこの地に根付いた神楽が、また再び上演される日が来ることを願っている。

最後に、本稿制作にあたっては、大川自治会の皆様、島根県の日和大元神楽団の皆様のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。観察調査、聞き取り調査等でお気づきの点があれば、御教授いただきますようお願い申し上げます。

参考文献・参考資料

- 『西日本諸神楽の研究』 1979年 石塚尊俊 慶友社
- 『防長神楽の研究』 1974年 御園生翁甫 未来社
- 『神楽源流考』 1983年 岩田勝 名著出版
- 『山口県の民俗芸能』 1982年 山口県教育委員会
- 『山口県の民俗芸能 / 二〇〇〇』 2000年 山口県教育委員会
- 『保存版 島根県の神楽』 2003年 石塚尊俊監修 株式会社郷土出版社
- 『豊北町史』 1972年 豊北町役場
- 『日本民俗大辞典』 1999年 吉川弘文館
- 『民俗芸能辞典』 1981年 東京堂出版
- 『島根の神楽 芸能と祭儀』 2010年 島根県古代出雲歴史博物館 日本写真出版
- 『企画展 石見神楽 舞を伝える 舞と生きる』 2013年 島根県古代出雲歴史博物館 ハーベスト出版
- 『山口県の神楽』 2002年 財前司一 財前由喜子
- 『防長風土注進案 第十八巻 先大津宰判』 1983年 マツノ書店
- 『日本庶民文化史料集成 第一巻 神楽・舞楽』 1974年 三一出版
- 『防長寺社由来 第5巻』 1984年 山口県文書館
- 『山口県民俗芸能緊急調査一次調査カード』 豊北町教育委員会資料

『豊北町大川の「みかがみ」祭 指定意見書』 1982年 豊北町教育委員会資料
『大川みかがみ祭』(DVD) 1981年 下関市立豊北歴史民俗資料館所蔵
『大川みかがみ祭①～③』(DVD) 2005年 下関市立豊北歴史民俗資料館所蔵
『豊浦郡大河野村客大明神由緒覚』 山口県立文書館所蔵
『大川客大明神極内勘諸入目請負附立帳』 1861年 山口県立文書館所蔵
『みかがみ祭神楽舞伝説』 大川自治会所蔵
『着付・小道具明細表』 大川自治会所蔵
『御鏡大祭・舞のせりふ』 大川自治会所蔵
『昭和8年 みかがみ祭資料』 大川自治会所蔵

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第13号

発行年月日 2018年3月
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8
TEL 083-788-1841
FAX 083-788-1843
印刷 藤井印刷株式会社
〒750-0009 山口県下関市上田中町 5-6-24
TEL 083-231-1612
FAX 083-222-8611
